

# 洛山寺考

——朝鮮の補陀洛の成立について——

## 一 はじめに

ソウル、景福宮のそばにある国立民俗博物館の一室に、百濟の祭祀遺跡を推定・復元したミニチュアの景観が展示されている。崖の上の平地で祭官らしき装いの人物たちが立ち居し、かたわらには供物の陶磁器や土器が並べられている。眼下の青い海には帆船が数艘浮かんでいる。それは、全羅北道、扶安郡格浦里の竹幕洞遺跡の景観で、日本語版の図録<sup>1)</sup>には、その祭祀について、

祭祀の性格は、遺蹟所在地の地理的条件と深い関連がある。辺山半島の最西端にあるこの竹幕洞遺蹟は、この一帯でもっとも高いところに位置し、七山の海を眺望<sup>ミヤビ</sup>に適した好条件を備えている。したがって、ここは沿岸を通り過ぎる船舶や当該地域の漁業権をつかさどる人々が祭祀を行っていた遺蹟であろうと考えられる。祭祀の目的は航海の安全や豊漁の祈願であつて、格浦里で口伝として伝えられる竜信仰や開陽老嫗の伝説などがこれを裏付けている。

(1)

と説明されている。この竹幕洞遺蹟は三国時代の百濟の祭祀遺跡として発掘調査された最初のものらしい。三国時代、海上交通や漁労活動にかかわる祭祀の場所は、むしろこの遺蹟に限られなかつただろう。往時の近海におけるさかんな漁労活動とともに、三国の中国や日本との関係が危険と隣り合わせの海上交通によって結ばれていたこと、そしてそのたくましい海上交通を通じて物資とともに有形無形の文化もさかんに運ばれていったであろうことをこの復元景観は印象深く教えてくれる。朝

## 神野富一

鮮の補陀洛と称される洛山寺の成立についての考察にも、この海上交通への視点が重要となる。

朝鮮半島東海岸の中ほどに、韓国江原道襄陽郡がある。襄陽郡は三国時代には高句麗に属して翼峴あるいは伊文県と称し、統一新羅時代には翼嶺と称した(東国輿地勝覽)。五峰山洛山寺(現地音ではナクサンサ)はその襄陽郡降峴面の、広大な東海<sup>トシヘ</sup>に面した丘の上にある。現在寺院には観音を祀る円通宝殿や宝陀殿、高さ十六メートルの海水観音像のほか、海に面して開基伝承にゆかりのある義湘台、紅蓮庵などが散在し、多くの参拝客を集めている。周辺には美しい海に面して白砂の浜が広がって行楽の場となり、海産物を売ったり食べさせたりする店も多く立ち並び、現在洛山地区は韓国の観音信仰のメッカであるとともに、東海岸の有力な観光地と化しているようだ。

### 一 洛山寺の開基伝承

洛山寺の開基伝承をしるす古い文献としては、まず一然の三国遺事(一一二八〇年ころ成立)、次いで東国輿地勝覽(一四八一年成立)などの地誌類に引用されている高麗僧、益莊の記が挙げられる。両書の所伝は基本的には一致するが、内容・表現にはかなりの差異もある。

三国遺事卷三「塔像第四」の「洛山二天聖 観音 正趣 調信」と題した記事からみていくことにする。いささか長いその記事は、仮にタイトルを付けるとすれ

ば、

- ① 義湘法師による開基
- ② 元暁法師の来訪
- ③ 梵日祖師の正趣菩薩安置
- ④ 洛山寺二宝珠の行方
- ⑤ 調信の夢

という五つほどの内容から構成されている。このうち寺の開基や中興にかかわる伝承は①、③とみられる。③の後に、①、③が「古本」に拠ったことがわかる注記があるから、この開基伝承は三国遺事の成立よりも古く記録されていたことになる。

まず①を挙げる。

昔義湘法師、始自唐来還、聞大悲真身住此海辺窟内、故因名洛山。蓋西域宝陀洛伽山、此云小白華、乃白衣大士真身住処。故借此名之。

齋戒七日、浮座具晨水上、龍天八部侍従、引入峴内。参礼空中、出水精念珠一貫給之。湘領受而退。東海龍亦献如意宝珠一顆。師捧出。更齋七日、乃見真容。謂曰、於座上山頂双竹湧生。当其地作殿宜矣。師聞之出峴。果有竹從地湧出。乃作金堂、塑像而安之。円容麗質、儼若天生。其竹還沒。方知正是真身住也。因名其寺曰洛山。師以所受二珠、鎮安于聖殿而去。

重要な伝承なので、試みに訳もししてみよう。

昔、義湘法師が初めて唐への留学から帰ってきたとき、大悲(観音菩薩)の真身がこの海辺の窟の中に住むと聞き、そこでここを洛山と名づけた。思うに、西域の宝陀洛伽山を小白華というが、そこは白衣大士(観音菩薩)の真身が住むところである。だからその名前を借りて洛山と名づけたのである。

義湘は齋戒すること七日、座具を明け方の水の上に浮かべた。そうしたところ、龍天の八部侍従が洞窟の中に引き入れてくれた。空中に向かって参礼すると、観音は水精の念珠一貫を取り出し、与えてくださった。義湘はそれを受け取って退いた。東海の龍もまた如意宝珠一顆を献った。義湘はそれを捧げて洞窟を出た。

更に齋戒すること七日、義湘は観音の真容を見ることができた。その観音が言われることには、「座上の山頂に双竹が湧くように生え出るであろう。其の地に仏殿を作るがよい」と。義湘はそれを聞いて洞窟を出たところ、果たしてまさに今地面から湧くように生え出している竹があった。そこでそこに金堂を作り、土で観音像をこしらえて中に安置した。その像は完全なお姿で生得にうるわしく、おごそかなことは生まれつきのようであった。まもなくその竹は地面の中に消えてしまった。こうしてまさにここに観音の真身が住むことがわかった。そこでその寺を洛山と名づけた。義湘は受け取った二つの珠を聖殿に鎮め置いて立ち去った。

読解上の注記を若干加えると、まず「龍天の八部侍従」とは「天龍八部衆」とのこと、天・龍・夜叉・阿修羅など八種の仏法の守護神をさす。また、「水精の念珠一貫を出して与えてくれた」という部分の主語を「龍天の八部侍従」とする読みがあるが、主語は観音とすべきである。次に引く益莊記にも「大聖、即ち窟中より臂手を伸ばし、水精念珠を授く」とある。また、龍が聖者に如意宝珠を献することは仏典にもある(如意宝珠転輪秘密現身成仏金輪呪王経卷一)。如意宝珠は龍の持ち物として仏典にしばしば出ている。それは大海に秘蔵されているが、もし人がそれを得れば貧窮困苦している衆生を救うことができる(不空罽索陀羅尼経、大智度論卷三五など)。それは水をつかさどるゆえに五穀が成熟し、人々が豊かになるからである。またそうして国が治まると如意宝珠が出現するともいい(大乘本生心地観経卷二)、後に国宝とされたというこの義湘の得た如意宝珠もそうした護国思想につながる文脈にある。

さて、この説話にはいくつかの注目すべき点がある。洛山寺の開基が有名な新羅僧、義湘によるとされていること、海辺の洞窟に観音の真身が住むとされていること、洛山寺という名前の由来、東海の龍の援助、などの諸点である。それらについては後述することとして、次に益莊記の対応箇所を見ておきたい。新增東国輿地勝覽の引用による。

襄州東北降仙駅之南里有洛山寺。寺之東数里許、巨海辺有窟。其高可百尺、其大可容万斛之舟。其下海濤常出入、為不測之壑。世称観音大士

所住处也。

窟前距五十許歩、海中有石上可鋪一席、出沒水面。昔新羅義相法師、欲親觀聖容、乃於石上展坐拜稽。精勤至二七日、尚未獲親。便投身海中。東海龍扶出石上。大聖即於窟中伸臂手、授水精念珠曰、我身未可親觀。但從窟上行、至双竹湧出處。是吾頂上。於此可當一殿安排像設也。龍亦獻如意珠及玉。師受珠而來、有双竹湧立。乃於其地創殿、以龍所獻玉造像安之。即茲寺也。

まず初めに、洛山寺の位置や観音の住む洞窟のありさまを説明している。洞窟は高さが百尺ばかり、大きさは万石の舟も入れられるほどで、常に海の波が入りし、そのために計測不能の深谷をなしているという。現在、上方をまたぐようにして紅蓮庵が建っている、その観音窟をさすのだろう。

続く義湘（義相）法師の話は、三国遺事の伝承と異なる点がある。洞窟の五十歩ばかり前に岩があり、義湘はそこに座って精勤したが、観音の聖容は見られず、ために海に身を投げた、そうしたところ東海の龍が義湘を救い上げ、観音は窟の中から臂手を伸ばして水精念珠を授けた、という部分などである。異伝というべきだろう。現在、洛山寺円通宝殿の側壁には開基伝承にまつわる絵が数枚描かれているが、中に奇抜な一枚がある。右上の岩場に座って合掌している義湘に向かって左下の岩から白い腕が異常に長く伸び、掌に大きな水晶の珠を載せている。まさに「観音は窟の中から臂手を伸ばして水精念珠を授けた」という場面の絵だ。

三国遺事にかえり、元暁法師の来訪をしるす②を挙げよう。

後有元暁法師、繼踵踵而來、欲求瞻礼。初至於南郊、水田中有一白衣女人刈稻。師戲請其禾。女以稻荒戲答之。又行至橋下、一女洗月水帛。師乞水。女酌其穢水獻之。師覆棄之、更酌天水而飲之。時野中松上有一青鳥。呼曰休醒□和尚、忽隱不現。其松下有一隻脫鞋。師既到寺、觀音座下又有前所見脫鞋一隻。方知前所遇聖女乃真身也。故時人謂之觀音松。

師欲入聖岬更觀真容、風浪大作、不得入而去。

義湘が去ってほどなく元暁も観音の真身に会おうとやって来た。観音は女人の姿

でそれを迎えたが元暁はそれと気づかず、結局風浪が起こって聖岬には入れなかった、という伝承である。観音は元暁を拒否したというのでなく、二度まで聖女の姿でまみえている。その元暁と観音とのやりとりは、文中に「戯れて」ともあるとおりどこかユーモラスであり、自由奔放で民衆にも大いに親しまれた元暁のエピソードとしてふさわしい。

さて、①②は、義湘・元暁という七世紀後半の新羅仏教界をリードした名僧二人が洛山寺の開基にかかわったことを語っている。フダラクは華嚴経などに説かれた聖所であるが、義湘（六二五—七〇二）は唐に留学し（六六一—六七二）、華嚴第二祖の智儼から華嚴を学んで奥義を究め、新羅に伝え広めて「海東華嚴の初祖」（宋高僧伝四）といわれた人であるし、元暁（六一七—六八六）もまた華嚴経疏や大乘起信論疏などを著作して華嚴を深く追究した。その元暁の大乘起信論疏が唐に伝わり、華嚴第三祖、法蔵の重要な著作である大乘起信論疏に大きな影響を与えたことなども明らかになっている。また法蔵は六九二年、敬愛する兄弟子の義湘に對して書を奉り、同時に自らの新著である華嚴経探玄記二十卷（「両卷未だ成らず」とする）などを贈っている。その探玄記には、善財童子が訪れた観音の住所の本の名が「通多羅山」であるともみえている。

フダラクの名は、不空羼索呪經（六世紀末ころ漢訳）・大唐西域記（六四六年成立）・新訳華嚴経（六九九九年成立）などにしるされ、中でも十六年間の求法の旅からの帰国後ほどなく太宗の命に成された大唐西域記（「布呬洛迦山」とする）によって唐の仏教界に広まったと思われる。すると、義湘も当然、旧訳華嚴経の「光明山」とともにフダラクの名は知悉していただろう。また三国遺事卷四、「義湘傳教」によれば、

永徽初、會唐使舩有西還者、寓載入中国。初止揚州。州將劉至仁請留衛内、供養豐瞻。

とあり、義湘は入唐の時、南路によって揚州に入り、しばらく滞在しているので、そこで義湘が直接間接に海上交通者たちの普陀山信仰にふれた可能性は十分にある。鎌田茂雄氏は、義湘が揚州で海洋信仰や民間に根づいた華嚴経入法界品の信仰に接触した可能性を述べている<sup>4)</sup>。以上の義湘の華嚴とのかかわり、フダラクの名の

伝承、普陀山信仰の体験などからすれば、金文経氏も説くように、遺事の「洛山」の命名や開基は義湘によるといふ程度はある程度の史実を含んでいるとみてよいだろう。

ただし、鎌田茂雄氏は、この遺事にみえる義湘説話を伝承にすぎないとみていいる。「この話は後代につくられた義湘についての説話であり、歴史的事実ではない。しかし、観音が朝鮮半島の洛山に示現したという伝説があったことは、この地方で観音が信仰されたことを示すものである。」<sup>6)</sup>「中国において観音信仰が補陀落迦霊場として定着するのは晩唐から五代にかけてであって、七世紀の義湘、元暁時代にはまだ行なわれていなかったとみるべきであろう」、また「洛山寺が実際に開かれたのは義湘の時代ではなく、九世紀に活躍した梵日(ホムイル 八一〇―八八七)の頃であったと思われる」と述べ、義湘による開基を否定している。

たしかに、中国のフダラクたる普陀山信仰の隆盛は九世紀中葉以降のことであるとみられる。しかし、北宋宣和六年(一一二四)成立の宣和奉使高麗図経に、「其深麓中、有蕭梁所建宝陀院」と、古く蕭氏の梁の時代(五〇二―五五七)に「宝陀院」が建てられたとする記事があり、普陀山には古くから観音が祀られていたことを伝えている。ここでは省かざるをえないが、そのほかにも九世紀より前に普陀山信仰が存在したことを証する若干の史料も残り、仮に六世紀ごろに普陀山信仰が発生したとしてそれを第一次のものとするれば、九世紀中葉以降に隆盛におもむいた普陀山信仰は第二次のものであったと考えられる。義湘は第一次の普陀山信仰にふれ、それを撰取して洛山に移植したのだろう。ただし、移植した主体は実際には義湘その人ではなく、普陀山信仰を体験した新羅の無名の海上交通者たちであり、それが後代において名僧義湘の事跡に帰して説話的に伝えられたのかもしれない。しかしそうだとすると、その移植の時代は次節に述べる梵日の時代までは下らず、新羅人の海上活動が活発化した七・八世紀ごろと考えてよいと思う。

### 三 梵日の伝承と普陀山

第二次の普陀山信仰の洛山への影響が、梵日祖師の正趣菩薩安置を説く、次の③

の説話にみられるのではないだろうか。

後有 崛山祖師梵日。太和中入唐、到明州開国寺。有二沙弥截左耳、在衆僧之末。与師言曰、吾亦鄉人也。家在 溟州界翼嶺德耆坊。師他日若還本國、須成吾舍。既而遍遊叢席、得法於塩官。「事具在本伝」。

以会昌七年丁卯還國。先創崛山寺而傳教。

大中十二年戊寅二月十五日、夜夢昔所見沙弥到窓下曰、昔在明州開国寺、与師有約。既蒙見諾、何其晚也。祖師驚覺、押數十人到翼嶺境、尋訪其居。有一女居洛山下村。問其名、曰德耆。女有一子年才八歳、常出遊於村南石橋邊。告其母曰、吾所与遊者、有金色童子。母以告于師。師驚喜。与其子尋所遊橋下、水中有一石仏。昇出之、截左耳。類前所見沙弥。即正趣菩薩之像也。乃作簡子、卜其營構之地、洛山上方吉。乃作殿三間安其像。

時は太和中(八二七―八三五)、入唐した梵日は明州の開国寺で、同郷の左耳のない沙弥に会い、帰国したら故郷に自分の家を立ててほしいと頼まれた。その後梵日は会昌七年(八四七)に帰国し、まず崛山寺を創立して伝教した。ところが大中十二年(八五八)二月十五日の夢に、昔出会った沙弥が現れてかつての約束の履行を促した。梵日は驚き、すぐさま溟州界翼嶺県を訪ね、洛山のふもと村で女とその子供に教えられて橋の下から水中の石仏を引き出してみると、それは正趣菩薩像で、それがかの沙弥自身なのであった。そこで卜いをして洛山の上に仏殿を建て、その像を安置した。

記事中、「正趣菩薩」とは、華嚴經入法界品の中で文殊菩薩の教えに従って善財童子が五十三人の善知識を訪ねた、その二十八番目が観音菩薩だが、その次、二十九番目に訪ねたとされる菩薩の名である。善財童子が「光明山」(新訳では「補怛洛迦山」)で観音の説法を聴いていたとき、この正趣菩薩が東方の空から出現し、「金剛山頂」に降り立った後、観音のもとへやって来た。そこで観音に勧められ、童子は正趣菩薩に教えを受ける、というふうには展開している。華嚴經探玄記には、「住金剛山頂」者則是此光明山也、つまり正趣菩薩が降り立った金剛山とはすなわち観音菩薩の光明山にほかならないとしているが、ともかく童子は光明山の観音

のもとで、観音の説法会にやって来た正趣菩薩の教えも聴いたことになっており、観音と正趣はゆかりが深い。洛山にはまず義湘によって観音菩薩が祀られ、まもなく元暁も訪れ、次いで梵日によってその観音にゆかり深い正趣菩薩も祀られた、よって記事の題を「洛山二大聖 観音 正趣」とするというのが遺事の語り口である。

さて、この梵日説話にあらわれる地理や年代は、唐の普陀山信仰のかけを感じさせないではおかない。

梵日（八一〇―八八九）もまた当時であって高名な禅僧であった。祖堂集の伝（卷一七、「東国通曉大師」）によれば、梵日は十五歳で出家、二十歳で京師において具足戒を受け、その修行ぶりは同行者の手本となった。太和年中（八二七―八三五）に王子金公義琮が入朝するのについて入唐し、巡遊して遍く知識を尋ね、塩官県の齊安禅師のもとに参じて大悟、後には会昌の廃仏にも遭遇したが高山に隠れ住んで修行を続け、南方の韶州にも赴き禅宗六祖慧能の祖師塔を拜した。会昌六年（八四六）に帰国し、大中五年（八五二）には請われて故郷の溟州岬山寺（五台山にあり、洛山にも近い）に住し、以後三代の国王から欽仰され、国師に擬されて京師に招かれたが下山することなく、文徳二年（八八九）八十一歳で示寂した、という。

遺事によれば、その梵日が渡唐して沙弥と出会ったのは明州の開国寺においてであった。また諸所で修行した後、法を得たのは杭州の塩官県においてとされ、祖堂集にも塩官県の齊安禅師のもとで六年勤めたという。そのころは新羅人が黄海や東シナ海の航路をほぼ支配しており、梵日の唐との往還や修行地もそうした新羅人の活動と関係があったにちがいない。

そしてそのころ、杭州湾の沖では、普陀山信仰が隆盛におもむいていた。その「不肯去観音」の開基伝承には、同じプロットで観音を祀った主体の異なる二つの伝承がある。その一つは先述の宣和奉使高麗図経巻三十四に載るもので、新羅商人が祀ったとし、もう一つは宝慶四明志（一二二五―一二二七年成立）巻十一や仏祖統記（一二六九年成立）などに伝えられるもので、観音を祀った主体を日本僧、慧夢えむによるとする。そうして祀った主体は異なるけれども、いずれも五台山で観音像

を得、明州（寧波）から帰国しようとしたが普陀山に到って船が座礁した（宝慶四明志では、海が荒れた）ので観音を島に祀った、後にその観音像は城内の開元寺に安置された、今普陀山に安置しているのは後に造られたものである、という説話のプロットはひとしい。そして普陀山信仰の盛んなありさまについて、高麗図経には、観音が祀られて以来、「海舶往来必詣。祈福無不感応」というありさまであったといい、仏祖統記にも、「去洞六七里、有大蘭若。是為海東諸国朝覲商賈往来、致敬投誠、莫不獲濟〔草菴録〕とある。これらの記事は、九世紀のころ、中国と新羅などの間を航海した海上交通者の間にフダラクとしての普陀山への信仰が盛んになっていたことを伝えているだろう。

ところで、この普陀山の伝承と先の梵日の伝承を比較してみると、奇妙な暗合が認められる。説話の年代は同時代というところか、遺事と仏祖統記ではいずれも大中十二年とされる（宝慶四明志は大中十三年とする）。説話の場所という点でも、一方は鄭の開元寺、他方は明州（浙江省鄭県）の開国寺と類似する。慧夢の事跡の中に杭州塩官県靈池院の齊安禅師に拜謁し、その高弟義空長老を伴って帰国し、日本に初めて南宗禅を伝えたということがある（元亨釈書など）が、梵日も同じ塩官県の齊安禅師のもとで大悟したといい（祖堂集）、齊安禅師は同一人であり、場所のみならず修行過程や宗旨においても両者は相当に近いことになる。また高麗図経では、呉越（五代十国の一つ）の錢氏（十世紀、五世八十四年間呉越王となった）が観音像を城中の開元寺に移したといい、その城とは杭州城のことであろう。ちょうど梵日が留学していたころ、まさに梵日の活動範囲において普陀山信仰は盛んだったのである。なお、梵日の中国での活動の年代と普陀山の不肯去観音の開基伝承の年代には十数年ほどの前後があることになるが、それはこの際問題とするにはあたるまい。海上交通者らの間における普陀山信仰の隆盛の中で慧夢らのエピソードも生まれたとみられるからである。

さらに、普陀山には「正趣峰」という山があったことが普陀山の古い地誌である大徳昌国図志（一二九八年成立）や補陀洛迦山伝（一三六一年成立）にみえていゝ。それらにおいては「正趣峰 靈鷲峰 観音峰」と、島内にある山は三峰のみが挙げられ、その一番目に「正趣峰」が挙げられており、当時重要視された山であつ

たことがわかる。普陀山には先述の華嚴經入法界品にもとづく「善財洞」も古くからあり(大徳昌国州図志以下)、普陀山はいつの時代からかいわば入法界品に描かれた観音の補陀洛世界が意識的に島内に引き写されてきた歴史をもつ。「正趣峰」の存在も入法界品にもとづく正趣菩薩への信仰が普陀山に古くから存したことを示し、それが洛山への正趣菩薩安置を説く梵日説話の形成に影響した可能性があるとみられる。

つまり、梵日の説話は、九世紀の中ごろにおいて普陀山信仰と洛山信仰が再び密接な関係をもったことを反映していると考えられる。そのころ、僧侶や商人を含む海上交通者、また海民の間で昂揚した第二次の普陀山信仰が、その空気を呼吸した新羅の人々によって東海のほとりにもたらされ、地元の人々の支持も受け、梵日伝承とともに洛山の中興がなされたということではなかったか。あるいは、もつと直接的に、実際に梵日が中心となって普陀山信仰を洛山にもたらし、洛山を中興した可能性もある。

洛山寺の南方約五〇キロの山岳地帯には、梵日も帰国後に長年住した岨山寺を含む五台山が広がる。そのいわれは三国遺事卷三に、「洛山二大聖 観音 正趣 調信」の次に「台山五万真身」と題して、七世紀中葉の慈蔵法師が渡唐して文殊菩薩から本国の五台山の所在を教えられたことなどがしるされ、中国の五台山信仰が移植されたことが明らかである。洛山信仰が普陀山信仰の伝播、ないし移植であることの一つの傍証になるうか。ちなみに、普陀山の話でも、新羅商人や慧夢がはじめに観音像を得たのは中国五台山においてであり、また四明の開元寺内には故事にゆかりの「五台観音院」があった(宝慶四明志以下)。唐・新羅両国において、五台山とフダラクはつながりが深いのである。

#### 四 洞窟の観音・龍神信仰

現在いくつかの堂宇をかまえる洛山の信仰の核となる場所は、史料によっても地元の研究者によっても、観音窟だと教ええられる。海に臨む義湘台から百メートル余、崖に沿ってつけられた道を歩いたところに、朝鮮の寺らしい青緑の瓦屋根の、

三間四方の紅蓮庵が建っている。そのかたわらから下を覗きこむと、十メートル余り下は海面で、岩を裂いて幅一、二メートルの切れ込みが走って庵の下にもぐっている。つまり、庵は洞窟の上に、それをまたぐように建てられているので、庵の直下も背後もまだ洞窟の一部なのだった。この洞窟や庵については、地誌では輿地圖書(一七五七年刊)に、

在 府東十五里五峰山之下。海濼石崖中坵、海水入 其中 噌吰作声。其上架小閣 安 観音像。

と紹介されている。海のほとりの断崖が裂け、海水がその中に入ればかまびすしい声をなす。その上に小閣を架け造って観音像を安置した。現在、庵のそばの斜面に観音寺院の周囲にはよく見かける竹(笹)が群生しているのは説話の「双竹」にちなむのだろうか。しかし、「座上の山頂に双竹湧生すべし」(遺事)といわれた場所は、「山頂」とあることからすればもつと上の方だろう。

ところで、この洞窟のたまたまは普陀山の潮音洞(また梵音洞)に非常によく似ている。潮音洞は島の南東部、慧夢が観音を祀った場所という不肯去観音院から少し下った岩場にある海岸の洞窟である。その洞窟は海潮を呑み込み吐き出し、昼となく夜となく大きな音を響かせる。そして洞窟の前に石橋があり、信者がそこに至って熱心に祈ると、観音が座して説法するようすが見えたり、善財童子が俯仰して送迎したり、あるいはただ碧玉の浄瓶が見えたり、頻伽の飛舞が見えたりするという(仏祖統記)。あるいは大徳昌国州図志にも、大中年間に西域僧が来て十指を燃やし尽くすと観音が示現し、妙法を説き、七宝色石を授けた場所、および慧夢の船が留まった場所がやはり潮音洞であるとしている。普陀山の中では潮音洞こそが観音真身の住所であり、信仰の発祥地とされているので、この事情は洛山の観音窟の場合ときわめてよく似ている。梵音洞は島の東部にある洞窟で、高さ約百メートルばかり、やはり海潮がなだれ込むと轟音をあげ、観音示現の場所であるとされる。またそこでも洞窟の真上に堂宇が建てられている。

真身の観音が海のほとりの洞窟に住むことといい、その洞窟が波を呑みこみ、轟音とともに潮を吹き上げるようすといい、洛山の観音窟は普陀山の潮音洞を模したものでないか。それら伝承や自然景観の相似からは、普陀山信仰の洛山への伝播

が強く思われるのである。

相似はまた、海龍信仰に関しても認められる。詳しくは別稿によりたいが、洛山地区では遅くとも高麗時代から「東海神廟」という東海の龍王を祀った堂宇が存在した。これは中国で国家が四海の海神を祀った制度の移植で、中国ではすでに隋代から東海と南海の神を海上交通の要所に祀ってきた。中国の東海神廟は、隋・唐代は会稽県にあり、北宋前期には山東半島の萊州掖県にあったが、元豊元年（一〇七八年）、明州定海県の東北五里の地に移祀された<sup>11)</sup>。この東海神廟の存在は、洛山付近が古くから海上交通の要衝であり、海龍信仰のさかんな土地柄であったことをうかがわせる。また東海神廟と洛山寺がごく近くにあることは、中国の東海神廟が会稽県また定海県と、普陀山の近くにあることとの相似を思わせないではおかない。

「東海の龍」は国つ神の代表ともいふべき存在として、三国遺事にも多く登場している。そこでは王権とかかわって護国・護法の性格が強調されているが、背景には民衆の豊作豊漁、また海上交通の安全を祈願する海龍信仰が広く存在したことがうかがわれる。そして東海神廟の置かれた洛山地区は、古くからそうした海龍信仰のさかんな土地柄だったと推測される。

## 五 海 の 道

普陀山信仰や洛山信仰は海上守護の信仰であったので、その移植は僧侶の活動ばかりによったとはいえない。移植の主体に、あるいはそれを支えた人々として、商人・船主・船人などの海上交通者や漁師などの海民の存在を考える必要がある。ここではその一助として、当時の唐——新羅間の海上交通を瞥見しておこう。

八・九世紀のころは新羅の海民・商人らが黄海・東シナ海方面の海上交通・海上貿易をほぼ独占する勢いで、特に唐——新羅間の外交・交易がさかんであった。のみならず、円仁（八三八〜八四七年在唐）の入唐求法巡礼行記がリアルに描き出しているように、新羅人の旺盛な活動は唐の東海岸に自身の居留区を現出させるまでになっていた<sup>12)</sup>。当時の唐——新羅間の海上交通の様相について、一つの定説的な理解を引いておこう。

唐へ行く海路は、今の全羅南道の靈岩から上海方面へ行く道と、京畿道南陽湾から山東半島へ行く道があった。一方、慶州から近い国際貿易港である蔚山にはイスラム商人まで往来するようになり、このときには唐の産物ばかりでなく西域の商品も輸入した。

そして新羅人がしばしば唐に往来して、山東半島と揚子江下流一帯に新羅人の居住地である新羅坊が生まれ、新羅所、新羅館、新羅院が建てられた。（中略）

とくに、張保臯は今の莞島に清海鎮を設置して海賊を掃蕩した後、南海と黄海の海上交通を支配し、唐、日本との貿易を独占したばかりか、大きな政治勢力にまで成長した。その他の地域でも海上勢力が大きくなっていった<sup>13)</sup>。

かの梵日も右記のいずれかの航路で往還し、主に杭州や明州という海に近い都市の寺院で修行したのだし、普陀山の信仰にも多大な関心を寄せたことだろう。そしてここにもあるように、航路は西海の唐——新羅西岸のみならず半島南部にも開け、蔚山は国際貿易港として栄えていた。さらに東海には新羅——渤海間の航路も存在した。このような当時の新羅人の旺盛な海上活動を考慮すれば、もともと海上交通者や周辺の間で起こったと考えられる普陀山信仰が、義湘のころ、また梵日のころに海上ルートを通じて洛山にもたらされた可能性は十分にあるというべきである。

宋代の一・二六六に書かれたとされる張邦基・墨莊漫録の「宝陀山記」に、東望三韓外国諸山、在杳冥。海舶至此、必有祈禱。寺有鐘磬銅物。

皆鷄林商賈所施者、多刻彼国之年号。亦有外国人留題、頗有文彩者<sup>14)</sup>。とある。寺に寄進された鐘磬は皆新羅商人のものであるといい、海を行く新羅の人々によって普陀山がいかに熱心に信仰されたかを伝えている。

そのような新羅の海上交通者たちも、おのずから海龍の信者たちであったろう。その彼らの間に、海龍をしのいで海上守護・海難救助をしてくれる観音が信仰されるようになった。説話における東海の龍が義湘法師に如意宝珠一顆を献る場面、それは護国の意図をはらみつつも、海上交通者や海民の素朴な海龍信仰が、海の女神ともなった観音への信仰に取り込まれていったことの象徴でもあったにちが

いない。

## 五 おわりに

朝鮮のフダラクとされる洛山について、三国遺事などの伝承の分析を行い、また洞窟信仰、東海の龍の祭祀、古代の海上交通の状況などを手がかりに、洛山信仰が普陀山信仰の影響下でまずは七世紀後半、義湘のころに成立し、次いで九世紀中ごろの梵日のころに中興があったことを推定した。すでに「インドに発し、中国に定着した普陀山の補陀洛迦信仰は、朝鮮半島へ渡り、広まっていた」と簡略にはいわれているとおり、洛山信仰は普陀山信仰の伝播、ないしは移植という面が強い。ただしその影響は、少なくとも七世紀後半と九世紀中ごろの二度にわたって大きな波があったとすべきだろう。また、洛山信仰の成立や発展には僧侶のほかにも海上交通者の活動が大きく関与していたこともうかがわれる。

それにしても、長い海岸線をかかえていた新羅において、なぜ東海岸でも都の慶州(金城)からはかなり北方にある洛山にフダラクが成立したのかという疑問はなお残る。この問題の解明は容易ではないが、一つの鍵は太陽信仰の存在にあるのではないかと思う。各地のフダラクをみていくと、太陽信仰がさかんであった土地が多い。洛山寺も朝鮮半島中部のよく日の当たる丘にあり、現在でも元旦には日の出を見る人々でにぎわうという。洛山は襄陽郡に属するが、「襄陽」は「昇る太陽」の意味である。ただし、この問題はフダラクと太陽信仰の関係として別に論じることにしたい。

### 注

- (1) 『国立民俗博物館』(二〇〇二年十月再版)。
- (2) 本文は金思燮訳『完訳三国遺事』(一九九七年)による。ただし、新字体に改め、返り点を付した。以下同じ。
- (3) 江原郷土文化研究会編『襄陽歴史資料集』(二〇〇三年)に収められた影印本による。新字体に改め、返り点を付した。以下同じ。朝鮮群書大系所収の『東国輿地勝覽』(一九二二年)も参照した。

- (4) 鎌田茂雄『新羅仏教史序説』三三〇頁(一九八八年)。
- (5) 金文経(高慶秀訳)『在唐新羅人社会と仏教——入唐求法巡礼行記を中心にして——』(『アジア遊学』二六、二〇〇一年四月)。また、氏もふれているが、釈体元の「白花道場發願文略解」(奥書によれば一三二八年成立。韓国仏教全書六所収)によれば、義湘は洛山に詣でて「白花道場發願文」を作ったという(師洛山観音窟に詣で、礼拝發願して斯の文を述ぶ)。史実であれば義湘が洛山寺を創建した明証となるが、その史料性の評価は私の手に余る。
- (6) 鎌田茂雄『観音のきた道』一七五頁(一九九七年)。なお氏は、義湘・元暁以前の時代に、西域ルートによって高句麗にもたらされた観音信仰が当地で独自の観音信仰を創りあげていたと推定している。注(4)の書、四〇三頁(一九八八年)。
- (7) 注(4)の書、四〇一頁。
- (8) 鎌田茂雄『韓国古寺巡礼(新羅編)』一四七頁(一九九一年)。
- (9) 現在も島の南方に「正趣峰」があるが、これは旧称「玉趣峰」であったものを清初に普濟寺の住持潮音が善財童子の故事によって改名したものであるという(『普陀山志』五二頁、一九九五年、など)。
- (10) 注(3)の書による。
- (11) 古林森広「宋代の海神廟に関する一考察」(『吉備国際大学研究紀要』五、一九九五年)。
- (12) 当時の航路や新羅人の活動については、内藤篤輔『朝鮮史研究』第八章、第十章(一九六一年)に詳しい。また近年の研究には、注(5)の論文、李基東「張保皐とその海上王国」(上)(下)(『アジア遊学』二六・二七、二〇〇一年四月・五月)、浜田耕策『新羅国史の研究』第四章「王権と海上勢力——特に張保皐の清海鎮と海賊に関連して——」(二〇〇二年)などがある。
- (13) 大槻健ほか訳『新版韓国の歴史 第二版——国定韓国高等学校歴史教科書』九六・九七頁(二〇〇三年)。
- (14) 『普陀洛迦山志』(普陀山仏教協会編、王連勝主編。一九九九年刊)による。
- (15) 鎌田茂雄『観音のきた道』一七五頁(一九九七年)。



## The Origin of the Belief in Rakusanji, the Korean Fudaraku

KANNO Tomikazu

**Abstract :** Rakusanji, on the east coast of the Korean peninsula, is famous as the Korean Fudaraku, the place where Kannon lives. In this paper, I state how and when this Fudaraku originated.

I have analyzed the articles in the *Sangokuiji*, and reviewed the belief in caves, the rite of the dragon in the East Sea, and the circumstances of the sea traffic in ancient times. And I presume that the belief in Rakusan was influenced by the belief in Fudasan in China, and originated in the latter half of the seventh century, and expanded in the middle of the ninth century. I also suggest that it was not only Buddhist priests, but also lay people who went over the sea, who contributed to the origin and expansion of these beliefs.